

# 老人ホームで初期消火に失敗したら

東京理科大学大学院国際火災科学研究科

教授 小林 恭一



先日、長崎市の認知症高齢者グループホームで火災が発生し、4人のお年寄りが亡くなかった。直後には、新潟市の障害者グループホーム火災でも一人が亡くなっている。相次ぐ火災で、改めてこの種の施設における火災対策の重要性が浮き彫りになった。

多数の自力避難困難な入居者を、少数の職員で、火煙が拡大して危険になるまでの間に安全な地上まで全員避難させることは、事実上不可能だ。このため、この種の施設では、「絶対に火災を発生させない。」、「それでも火災が発生したら、とにかく初期消火。」が大方針になっている。スプリンクラー設備を設置する、というのもその延長上にある。

この考えはもちろん正しい。だが、その裏で「初期消火に失敗したら打つ手がない。」と考えているとしたら、それは必ずしも正しくない。この種の施設には、様々な防火や避難のための設備等が設置されている。それらの役割や使い方を知り、正しい戦略を持ち、その戦略に基づいて訓練していくれば、初期消火に失敗しても、被害を最小限に止めることができる。

その戦略とは、第一に消防隊に極力早く来てもらい、第二に消防隊が到着するまで（通報後6～8分）の間火煙の拡大を抑え、第三に入居者を火煙に接触させず消防隊が救出しやすい場所に待避させておく、ということだ。

第一は、夜間、自火報のベルが鳴ったら、躊躇せず、即座に火災通報装置のボタンを押して消防に通報することだ。消防では折り返し確認の電話をかけて来るが、これに出ていると時間をとられるので、人手がない時には電話に出ない。電話に出なければ、消防は「本当の火災だ」と判断して出動する。

第二は、火煙の閉じ込めだ。火災を発見したら、その部屋に要救助者がいれば助け出し、その後、火元をめがけて消火器を放射し、火災室の戸を閉めて

火煙を閉じ込める。閉じ込めができれば、あなたが勝つチャンスは十分ある。

各室が連続バルコニーに面していれば、第三として、各部屋の廊下側の戸を全て閉める。各部屋に入ってバルコニー側の戸を解錠し（いざとなったらバルコニーだけ使って救出できるようにするため）、廊下側の戸を閉鎖する動作を繰り返す。入居者はそのまま部屋に留める。

この一連の動作が完了した段階では、入居者は火災室の戸と自分の部屋の戸の2枚の戸により火災と隔てられていることになる。ここまで3分でできるように訓練する。（施設での検証では、これに非常放送、排煙、検索、防火戸閉鎖を加えても、2回目で3分を切った）。

消火できなかった火災は成長し、煙が次第に廊下に出てきて天井付近にたまり、やがて降下して各居室に浸入していく。フラッシュオーバーが起こって火煙が一気に廊下に噴出して来る可能性もある。それでも、全室が同時に危険になるわけではない。危険になりそうな部屋から順次バルコニーに避難させる。この一連の行動の途中で消防隊が到着するので、後はその指示に従えば良い。

バルコニーのない施設、各室の廊下側に戸がない施設などについては、さらに別の戦略が必要になるが、要は消防隊が到着するまでに如何にして火煙と入居者を接触させないか、という方法論を施設の特性に応じて考えて、訓練をしておくことが大切だ。

日本防火技術者協会（私も会員）の有志は、社会福祉協会とタイアップしてボランティアでその方法論を教えており、希望があれば出前講座も行っている。関心のある方は、是非ご連絡いただきたい。